

言語運用能力と言語操作性

上原輝男

まずまず成人ならば、自分自身の言語運用の実力の程は自覚されているにちがいない。どの程度のことか自分に言えて、書けて、どの程度のもので読めて、わかって、どの程度のことか聞けて、わきまえられるか、大体見当がついているといつてよい。それは換言すれば、自分自身の言語運用の能力の自己診断でもあり、自己評価でもある。

たゞ謙遜がちな人、自慢したがる人、それぞれの性格によって、真正正銘のまゝ、とり出すことが出来にくいものであるうとは思ふ。しかし、本来、言語運用の能力は、他人によって測られるものではなく、自己診断・自己評価において意味を持つものである。本来、その正直な自覚があるから、

その真正正銘の自覚に対して、羞らったり、傲ったりして了うものなのかもしれぬ。

ところが、これは成人の場合であつて、子ども自体に、どれほど言語運用の自覚があるであろう。自分が自分の用に立てるために、言語を使う意識が根底にあるとは思えない。言語道具観は原始信仰でもなければ自然発生の体感でもあり得ない。むしろ、子どもは、体感が物言うのであり、体感の外に距離ある言語は、彼等にとって聞えないものに等しいか、さもなければ、周波数が違つて、彼等のアンテナに反応をもたらない。子どもは誕生の後、知覚・体感と音声との合体化に馴らされ続けることを経て、就学期に入ると、こんどは逆に、——ことばをあなたが使うのだ。——と言わな

いまでも、もっと上手に表現せよとか、いや上手でなくても、ありのまゝ、思ったとおりとか、子どものまわりのおとなたちは、自分の言語運用の能力の自覚から、その能力増進の激励と指導が義務のように迫る。はたして、このことは正しいことかどうか。おとなたちの自覚から、その能力の強か弱かしと願う結果でもあらうが、教育ママ的所業とあまり変らない。

思ったとおりと、おとなは気安く言うが、思ったことと、思ったとおり言うこととは、そう簡単に一つでないということが、どうしておとなたちにわからないのであらうと、思っている子がいないとは限らない。たゞ、そういうことが、言えなかったり、そういうことを言わないまでもかもしれない。思

電報ゲームというのを見かけることがある。教室の机の列の前から後へ、各列ごとに、同一の文言を申し送る。最後尾に達したとき、どれほど、最初の文言が変わっているかを楽しむのであるが、これなども自由な空気の中でやってこそ楽しいのであって、曾ての軍隊の復唱のような訓練なら別で、これで直ちに伝達の不充分さを叱るためには、ゲームを始める前の約束を厳密にすべきである。

りを口の中で言ったかどうか、正直に自問自答したいほしい。では、更に問おう。君は、実験の指示に従い、＼いまに自分は腹が痛くなつて来る＼と本当に思ったかどうか。いと、まあ、いうようなことで、筆者の言いたいことは、思うという場合、どこまでをことば通りとしてよいのか、少くとも、思ふことばとは一つになるときはあつて

ざげたり、虚偽を述べようとする魂胆ではなかつた。むしろ、内容が内容だけに、筆者の心の動きを忠実に写そうとしていた。しかし、思いとことばとの接触を思い、それをことばに託しはしたものの、託されたことば通りが思いそのものとされては、切捨てられた夾雑物の多さを思い出してうのである。

このように考えて来ると、言語運用能力の対象と範囲は意外と狭められて来てしまふ。いわゆる外言・内言説というなら、外言化の場合に限られる。つまり、他人のためにする言語運用能力だということになる。

「うまく言えないけれど」などと言う。これは果して、自分の口下手を言っている

のか、どうかはわからないことになる。うまう他人のためにするような言語運用の努力など、ほどほどにしたかもしれない。それぞれに憶えがあるだろうが、その努力を故意に放棄したり、断念したり、時にはつい怠ったりする場合もある。また逆に観察する立場からでも、口ぐせのように、うまう言えないけれど、など連発されると、一体、この人は「うまう言おうとどれほど努力しただろう？」と思われたり、「少し出し惜しみしているのではないか？」など勘ぐったりする時さえあるように思う。

こうなると、言語運用の能力の結果のように扱われて来た外言に、どれほど確かさがあるだろうか。決して、これによって、本質的な才能など問われるべきものではない。むしろ、もし強いて問うとするなら、むしろ、この外言が立ちのたかることによって、隠したものや曲げられたものを探知した後でなければ、本質とは全く接触しないだろう。

また、こうなると、もはや言語運用の能力という技能的なものよりも、多分にその人その人の性格的なもの、感覚的なもの自体の然らしめる反映といった方が、才能としては正確かもしれぬほどになる。それでもまだ言語の領域で扱おうとするなら、や

はり内言説を迎え容れるべきである。

内言は、外言と対比的に考えられ易いが、その両者の構成は、当然相違しなければならぬ。つまり、内言は、外言のような、対象が明瞭ではない。一体、内言とはいうものの、頭の中に働いていることばを手品師のように、取り出される人がいたらお目にかゝりたい。何らかの方法で指摘するだけでも、まさしく偉大な魔術使いである。時たま、催眠術師が、催眠した人にしゃべらせる。ちよつと内言のようにも思われるが、おそらく外言化と同じ過程を経たことばだと思ふ。では内言をどうしてとり出さるか。それはおそらくとり出す方法を捨てて、あるがままに、人の子の物思う道筋を辿る以外あるまい。つまり、徒然草のあの一節のようにである。

筆執れば物書かれ、樂器を取れば音をたてんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、骰子を取れば擲うたん事を思ふ。

あまりに茫漠としたことをと、思うこと勿れ。われわれは物思うことの自由を、あまりに不用意に尊崇したり過信したりしている。敢えて、人の子と断り、物思うことの道筋と用語した理由も、物思うことはそれほど自由闊達ではないし、発達の順序を狂わせることをしなうからである。

もし、その人において、今までの物思いとは異様な初体験としての物思いがあつて、それ以前の物思う構造・性質・傾向等の脈略がつかないとする。この時、人はこれを感動と呼び、その人その人にとって最大の讃辞を捧げて、畏怖するか狂喜するかを常とする。ある時は、ある人は、それを啓示だといひ、不思議だといひたりする。だが、筆者に言わすれば、以前の経験済みの物思いの履歴の中に、その物思いの内容・傾向・性質が見当らぬことに驚いているのである。一般的には、これを物思うことに飛躍があつたところであらうが、よく考えてみると、直ちに、それを過去の物思いの履歴に徴していることが先であり、逆にいえば、過去の物思いの履歴において、次の物思いの新しさは決定されているとすべきで、やはり、その履歴と断絶した飛躍は起り得ないのである。また、逆に、それを靈感と称したり、啓示だとするのも、過去の物思いの履歴との区別ではあらうが、同時に、その経験を履歴の中に、ことさらに位置を得さしめたともいえる。だから、ある人の物思いの履歴の上で、啓示であり、靈感であつたとしても、他のある人にとっては、それが特別なものであつたり、感動を呼び起さないことも起り得る。これこそ、

感激性・不感性等、性分によって左右されると考えがちだけれども、性分は、現在のところ、物思い（想念）と無関係とは出来ないだろう。

次に、あるがまゝに、物思いの構造に接近するためには、物思い（想念）の動機を考えねばならぬ。先の徒然草にあるように、物思いが触発されるためには、動機がある。この根源的なものとして、肉体的生理的感官知覚に発する記憶の在り方を無視できないだろう。いまいう在り方とは、概括的なまとめ（印象、イメージ）とは区別する。

この概括的なまとめ（印象、イメージ）としての記憶を曾つてのある時代、経験と呼んでいたのである。それは、無領域に、無秩序に、断片的な印象であるのかゝわらず、その印象の共有性において、人間は生活の拠り所とでもするように、その共通の印象を強調したり確認するばかりで、その異質の印象は除去したり、忘却しなければならぬよう仕向けられて来た。

たとえば、火に触れて熱いとする知覚に発するさまざまな印象の受け止め方が、実は記憶であったのに、いつしか人間は、逆にさまざまな印象の受け止め方を集約して、火に触れるとやけどするということが記憶されるのだと錯覚して下う。記憶は、記憶

の在り方が問われて始めて記憶なのに、記憶とは事が記憶されているのだと信じはじめ。別に言えば、記憶を内容にしてしまふのである。記憶を内容であると信じこみ易いのは、記憶が再生されることによるのだと思う。働きだから記憶され再生されるのであって、いわゆる捨てられ忘れられたその染みつき、染みつき方を拾い直さねばならない。

さて、やっと筆者は、本題に近づいた気がする。右の記憶に関する考察にもし誤りがないなら、われわれは言語運用能力に関する考え方も自ずと変化をもたらされねばならない。ことばの実体は何か。ことばに内容があるのであるか。記憶は、内容を記憶すると錯覚して久しいわれわれの頭にも、漸く記憶を染みつき、染みつき方だとする大胆な確信も芽生え始めた。ことばも同様、内容などというよりも前に、われわれの知覚・感覚の音声化だとしなければならぬ。子どもたちは、その音声化という内容を習うのではない。音声化自体、肉体の発育なのである。それが習慣化するのを、一般には記憶とよぶものだから、内容が獲得されたように思い、思考を逆立ちさせて、記憶と内容とが正しい因果関係にあるように思ふのである。音声化を記憶すると従前考え

られて来たが、音声化することが記憶であり、染みつき、染みつき方であったのである。

言語運用の能力という言い方に、ちょっと待ったをかけて、言語操作性を問い直してみようとしたのも、人間とことばとの根源的な出会いそれ自体に、大きな錯誤があるように思えたからであり、たとえてみれば、運動における、飛び箱の何段なの飛び、飛べないとか、走り巾飛びが何メートルだとか、空中転回ができる、できないという能力をいうほかに、運動神経というものもあるが、言語操作性はこれに似たものとして想定してみることができる。もちろん、言語操作性は運動でいうなら巧緻性などというのに相当するという方がわかりがよいだろう。操作性は運動神経そのものではない。しかし、一般的に、運動神経というときは、その働きの具合を言おうとするものであるし、巧緻性などという結果的なものよりもっと原因性を言いたいからである。言語運用ということと、言語操作ということとは紛らわしい。言語運用の能力という場合に、言語操作の能力といっても、言語操作性という代りに、言語運用性といっても、それぞれの意味に特別の違つた刺

激があるとは思えない。しかし、能力と性質とは明らかに異なる。言語運用の能力あるいは言語操作の能力という場合の言語は外言の運用なり操作である。しかし、言語操作性、あるいは強いて言語運用性という場合の言語は、内言を指しているであろう。内言は働き自体であるから、内言の操作、内言の運用というのは当たらない。内言と操作なり、内言と運用なりは実は区別がたいから、このまゝでは重言もしくは矛盾を侵しているともいえるが、現在のところ、敢えて言語操作性なる称語を用いたのである。

では具体的に「運動神経の働き具合をいうのと同じような言語操作性とはどんなものであろうか。今回の調査でとり上げた項目は、十円玉はなぜまるい？、替え歌、十七文字、物言いのいろいろ、電話の間接聴取、比喩表現等であった。各々についての調査理由は、それぞれの記事を見られたいが、先に記したたとえを使えば、言語発達にともなって、張りめぐらされていくアンテナ自体、あるいはアンテナの感度に似ているだろうか。

物が読め、物が書け、物が話せ、聞けるのも、その母胎としての物思うことの広がり、感度の成長発達なしの言語活動は考え

られない。

右の調査項目の外に、是非やりたかったものに、「先どり」がある。方法・準備・計画までは進んだが、遂に果し得なかった。これなどは厳密な調査結果を出すのは大変だが、言語操作性を刺激し発達させる大事な仕事だと思うので附記したい。

目で追って行くのと、耳で追うのと二通りできる。結局、ことばも時間現象だからある一連の文章を板書して行くなり、あるいはテープで適当な速さで流して行くなりして、用意した場所で中止し、子どもたちに先どりさせるのである。本論で述べた趣旨でいうなら、一定の物思いの物思う断面が垣間みられるとする仕かけのつもりであるがどうであらうか。

「おことわり」

「十円玉はなぜまるい？」
「十七文字」についての調査結果は本誌刊行までに間に合わず、本号に掲載できなかった。

町田市森野 4-16-20

株式会社 天勝社

電話 (0427) 22-6127(代)

印刷のご用は当社へ

